

AI for Scienceによる科学研究革新プログラム
AI for Science萌芽的挑戦研究創出事業（SPReAD）
第1回公募の採択結果について

2026年7月27日



文部科学省



SPReAD1CCO

「AI for Scienceによる科学研究革新プログラム」 AI for Science萌芽的挑戦研究創出事業（SPReAD*）

目的

* Supporting Pioneering Research through AI for 1,000 Discovery challenges

あらゆる分野（人文学・社会科学含む）の研究者が人工知能（AI）を活用して科学研究の高度化・加速化を図ることができるように、計算資源の確保等の研究環境を整備し、アカデミア全体にAI for Scienceの波及・振興を促進し、意欲ある研究者による次の種や芽となる新たなアイデアへの挑戦等の萌芽的・探索的な研究への支援を行うとともに、わが国独自の競争優位を築く革新的科学研究を創出する。

方向性

（1）迅速な支援

AI分野の技術的潮流の変化が極めて速いことを踏まえ、研究課題の審査・採択にあたっては、機動的な対応を可能とする柔軟な仕組みを構築するとともに、研究に必要な計算資源等を確保するための研究資金について機動的な提供を図る。



（2）伴走支援

AI分野に関する知識や経験の差により研究遂行に支障が生じることのないよう、研究者が適切な知見を得ながら研究を推進できる伴走支援を構築し、研究の高度化及び分野横断的な連携の促進を図る。

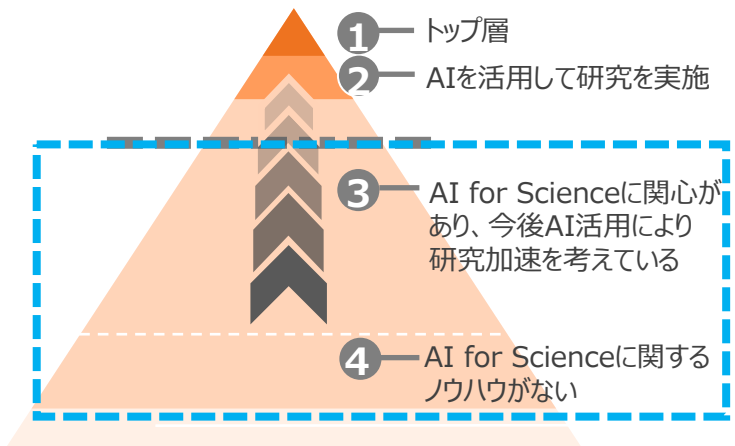


（3）独創的研究の芽出し支援

AI分野の技術動向が不確実で何が新たな価値を生むか見通しが困難な状況において、研究者の独創的な研究アイデアが創出される環境を、政府として積極的に支援・醸成を図る。

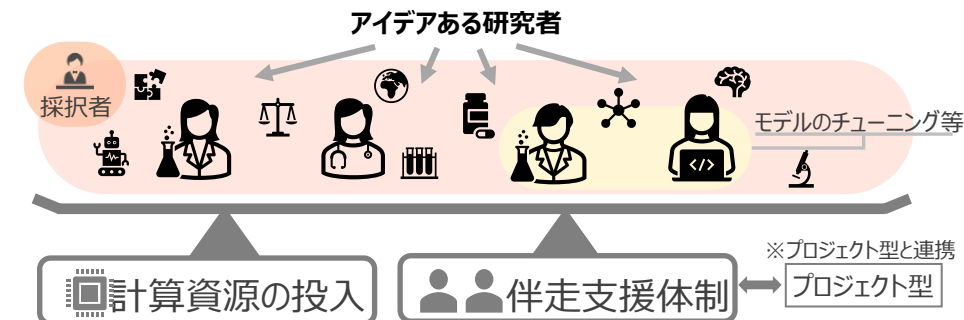


研究者のAI導入への関心度合い（イメージ）



研究体制（イメージ）

- ・情報共有、コミュニティ形成
- ・計算資源等の国内リソースとのマッチング
- ・相談窓口の設置
- ・AI for Science好事例の横展開
- ・AI研究者とのマッチング



支援内容

予算規模	5百万円以下
研究実施期間	半年程度
公募回数	年に2回（春頃、夏頃）
採択件数	1,000件程度

✓ あらゆる研究領域における、様々なユースケース及び新たなアイデアの創出を支援

研究領域は、人文学、社会科学から自然科学までのあらゆる分野が対象

本事業の対象とする研究領域と研究分野(例)

研究領域	定義	研究分野 (例)
臨床科学	疾患の診断・治療・予防・予後改善を目的に、患者・集団・医療現場を対象として知見を創出・検証する研究領域	内科学、臓器別内科・生体情報医学、外科医学、機能・感覚系外科、口腔科学、社会医学・看護学、スポーツ科学、獣医学 等
生命科学・薬学	生命現象を分子・細胞・個体レベルで解明し、創薬・薬理・生体制御へ展開する研究領域	細胞生物学、進化生物学、神経科学、薬学、生体構造・機能学、病理学、腫瘍学、脳科学 等
化学	原子・分子・物質の構造、反応、物性、合成、変換を扱い、新物質・新機能を創出する研究領域	物理化学、有機化学、無機・錯体・分析化学、高分子・有機材料類、無機材料・エネルギー化学、生体分子化学 等
機械・社会基盤・エネルギー工学	機械、構造、流体・熱、移動体、建築・土木、社会基盤、安全・防災、エネルギーシステムを対象に、設計・制御・実装を行う研究領域	材料力学・設計・生産工学、流体・熱工学、機械力学・ロボティクス、土木工学、建築学、航空宇宙・海洋工学、社会シ
材料・プロセス・応用医学	材料、界面、プロセス、ナノスケール構造・合技術を対象に、機能創出と応用実	
電気工学・電子工学・情報科学・コンピュータサイエンス	電気・電子・光・制御・計測・通信・ウェア、データ、ネットワーク、知能情報	
数学・物理学・地球科学	数理構造、自然法則、地球・宇宙シ、理論・観測・実験・解析で解明する研	
農学・環境学・生態学	生物資源、農業生産、食料、環境保、扱う研究領域	
社会科学	人間の行動、制度、組織、市場、政、実証的に分析する研究領域	
芸術・人文科学	文化、歴史、思想、言語、表現、価値、史資料分析により探究する研究領域	

開発・利用それぞれで、合わせて主に8のユースケースを想定

本事業で想定するユースケースと定義

ユースケースの分類

開発

学習用データセット構築



既存モデルの適応



AIモデル開発



既存モデル評価



利用

実験自動化・自律化



シミュレーション・デジタルツイン



発見・設計支援



高度データ解析・モデリング



他

その他

定義/判断基準

- 今後のAI・深層学習での活用を前提としたデータ収集や加工の過程が主である場合は本ユースケースに該当 (実験やフィールドワーク等によるデータ収集も含む)
- 既存の基盤モデルを、事後学習・ファインチューニングにより、軽量化・高速化・最適化することが主な場合は本ユースケースに該当 (学習を伴わないRAGの構築などは、本ユースケースでなく、「利用」から選択)
- 自らモデル構築し、データ収集、事前学習・微調整、検証・評価の一連のサイクルが全て含まれる場合は本ユースケースに該当 (大規模言語モデルに限らず、深層学習を活用した研究を含む)
- 既存モデルの「検証・評価・改善」を主目的としている研究は本ユースケースに該当。AIの改善を目的としていれば、仕組みの理解 (例: プロビング) の研究も本ユースケースに該当
- 物理的な実験器具・ロボット・機械等との接続が含まれる場合は本ユースケースに該当 (ただし、本事業期間中はコード開発等に留まり、実際の器具等を扱わない場合、本ユースケースでなく、「開発」「利用」から最適なものを選択)
- 既存のAIの利用¹が主で、現時点では「実際の実験・観測」による研究が必要なプロセスを、シミュレーション・デジタルツインにより代替することを企図する研究が該当 (スクラッチでのモデル開発の場合は「AIモデル開発」を選択)
- 既存のAIの利用¹が主で、仮説生成から実験計画など、「実際の実験・解析」などに至る前段階のプロセスをAIにより効率化・自律化する場合が該当
- 既存のAIの利用¹が主で、(シミュレーション・デジタルツインに該当するもの以外で) データ分析・予測の高度化をはかる研究が広く該当 (ただし、自ら一連のモデル構築を行う研究は「AIモデル開発」に該当)
- 主として理論的な研究や、「Science for AI」に近い研究、また、AIに関するメタサイエンス等、上記に当てはまらないユースケースや研究等

1. ChatGPT等の既存モデルをサービスあるいはAPI経由で利用したり、SaaS・AutoML系のサービス等を利用することを指す

✓ 機動的かつ挑戦的な審査・採択手法を導入

審査に関する前提

近年、挑戦的・分野横断的な研究課題や不確実性の高い研究課題については、従来型の審査手法のみではその価値や発展可能性を十分に見極めることが難しい場合があること、また、申請・審査の双方に係る負担を適切に軽減しつつ、研究の挑戦性を後押ししていくことの重要性が指摘されています。

こうした点については、日本学術会議の提言、基礎研究振興部会における議論及び『第7期科学技術・イノベーション基本計画』においても、研究評価の見直し、審査・資金配分手法の改善、先端的手法の活用等の方向性として示されているところです。

そこで、本事業においては、以下の考え方を踏まえ、機動的かつ挑戦的な審査・採択手法を導入することで、あらゆる分野における AI for Science の波及・振興を図ることとします。

- A) AI for Science の研究は分野横断的かつ探索性が高く、研究初期段階では将来的な発展可能性を一義的に見通すことが難しい中で、多様な分野における AI for Science に関する将来の発展可能性を広く確保する必要があること
- B) AI 技術の進展が極めて速く、これに対応する研究課題について時機を逸することなく支援していく必要があること
- C) 審査・採択に当たっては、申請書作成や審査の負担を軽減しつつ、独創的かつ挑戦的な提案を迅速かつ適切に評価しうる審査・採択スキームを導入することが必要であること

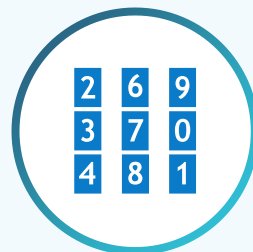
※本事業は、こうした機動的かつ挑戦的な審査・採択手法を試行的に導入する取組でもあり、その実施を通じて得られた知見については、今後の研究評価及び資金配分手法の改善や AI for Science 施策の検討に活用し、研究現場に資する形で還元していくことを約束いたします。

機動的かつ挑戦的な審査・採択手法等

ピアレビュー



無作為抽出



AIインタビューの活用
(※第1回公募のみ)



審査過程での
AIの補助的活用



形式チェックツールの
提供



SPReAD 第1回公募結果の概要

- ◆ 応募課題数：15,868 課題（うち、学生数：2,624 課題）
- ◆ 応募機関数：787 機関（大学、研究機関、高専、民間企業、非営利団体等）
- ◆ 採択課題数：456 件（うち、学生数：61 件） ➡ **採択率：2.9%**
- ◆ 採択機関数：164 機関（大学、研究機関、高専等）

公募概要



スケジュール

公募期間

第1回: 令和8年4月17日(金)～5月18日(月)正午

研究期間

第1回: 交付決定日から令和9年1月6日(水)まで



応募資格

所属機関に研究者等として認められ、e-Radに必要情報が登録されていること



補助上限

1課題あたり500万円以下 (直接経費として)

※上記の研究費 (直接経費) に加え、原則として直接経費の30%に相当する間接経費を機関等に配分します



対象経費 (例)

計算資源に係る経費、データ取得・利用料、API利用料、ロボットアーム等の設備費、データ整理・確認作業に係る謝金 等
※人件費は対象となりません。詳細は、公募要領をご参照ください

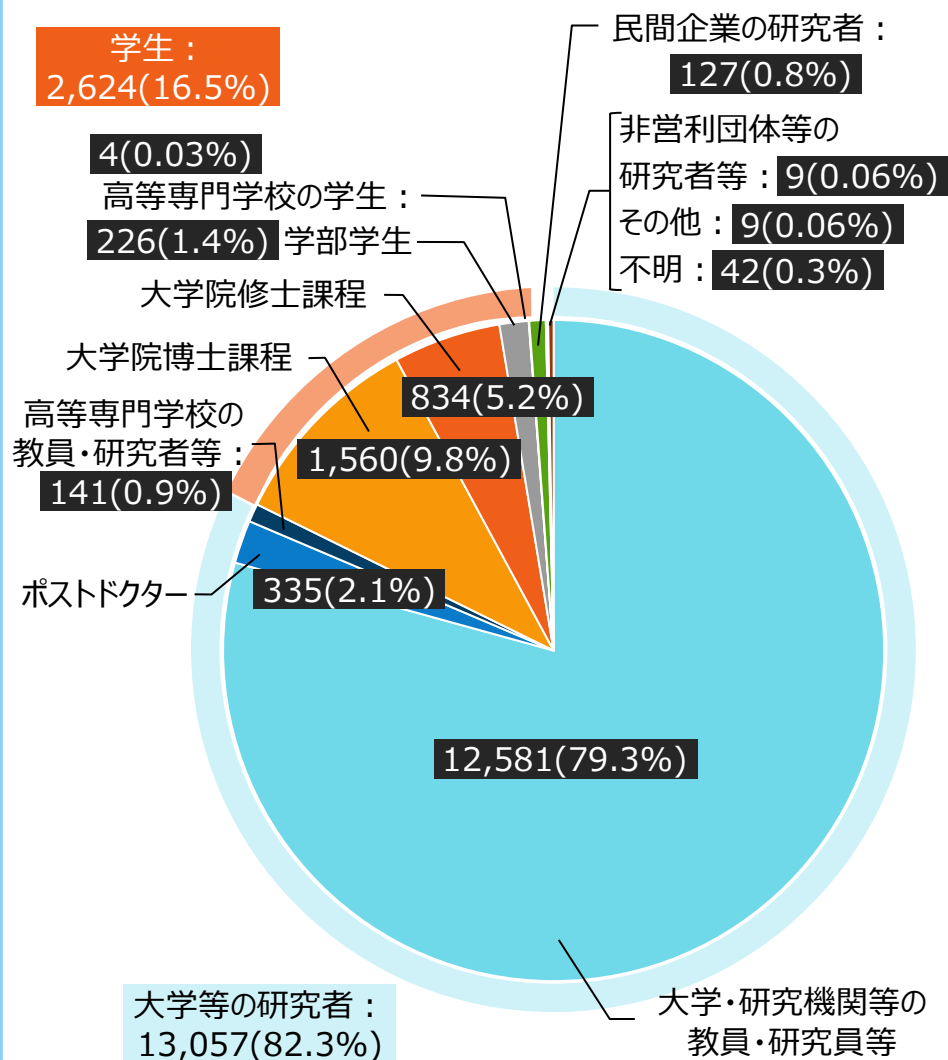


公募の対象

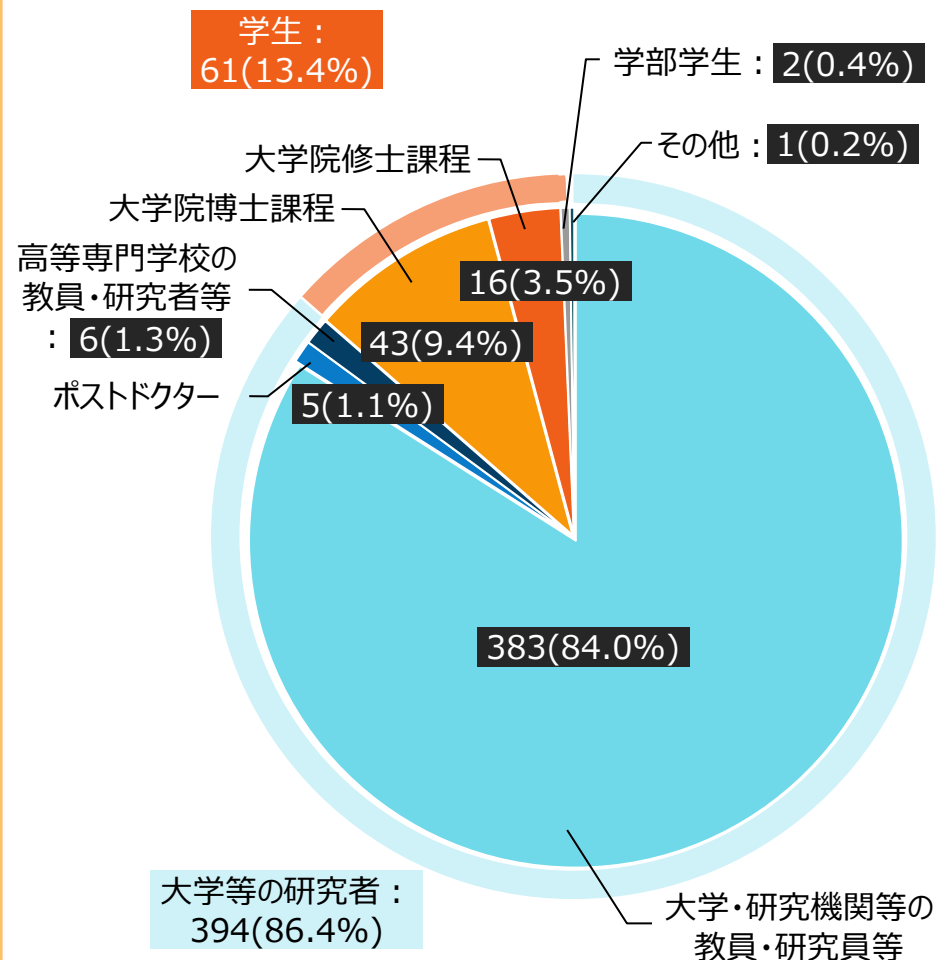
人文学、社会科学から自然科学までのあらゆる分野の研究者等を対象として、本事業の趣旨に合致する研究課題のうち、**研究代表者個人**で行う研究計画

SPReAD 第1回公募 採択結果【研究者等の属性別】

応募課題数：15,868件



採択課題数：456件

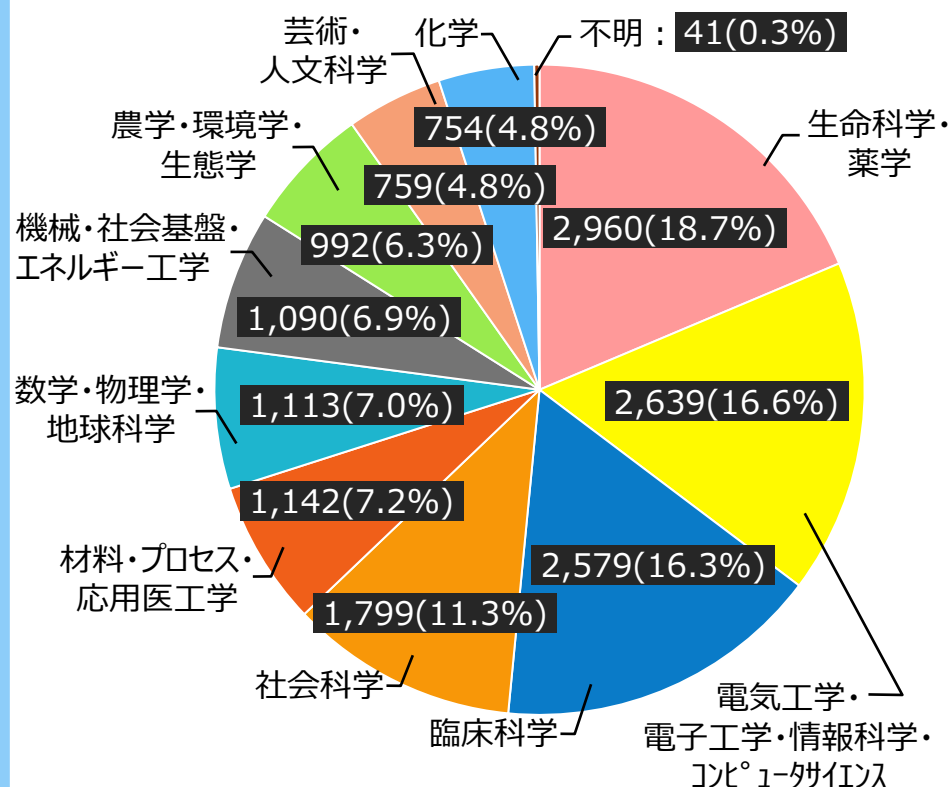


※ 応募者の自己申告に基づく集計

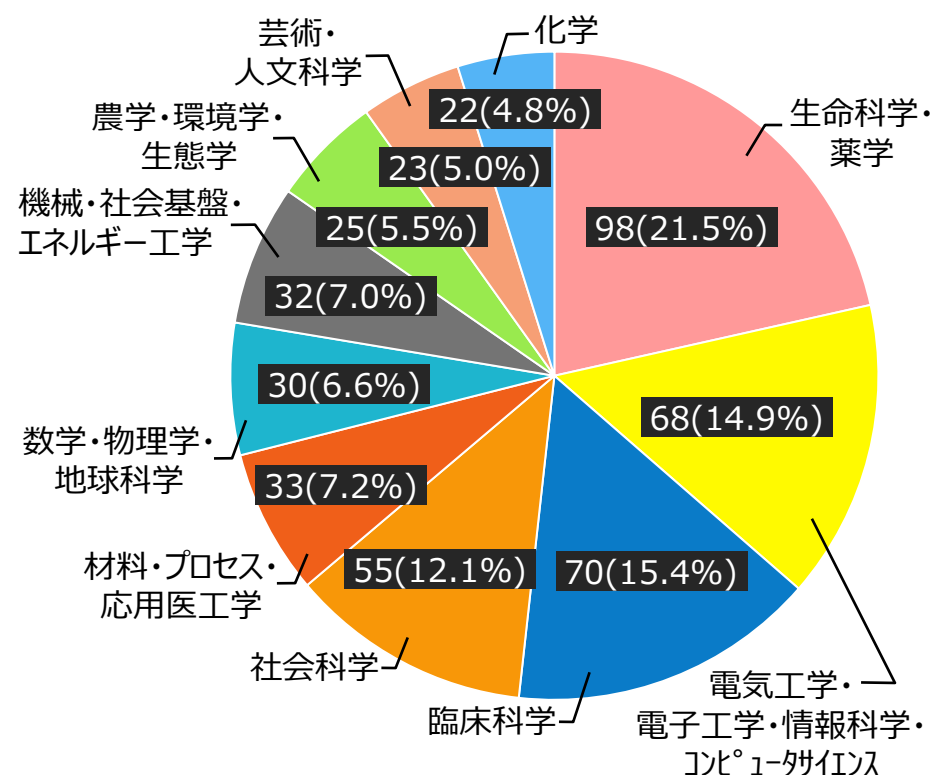
※ 高等専門学校の学生、民間企業の研究者、非営利団体等の研究者等は採択無し

SPReAD 第1回公募 採択結果【研究領域別】

応募課題数：15,868件

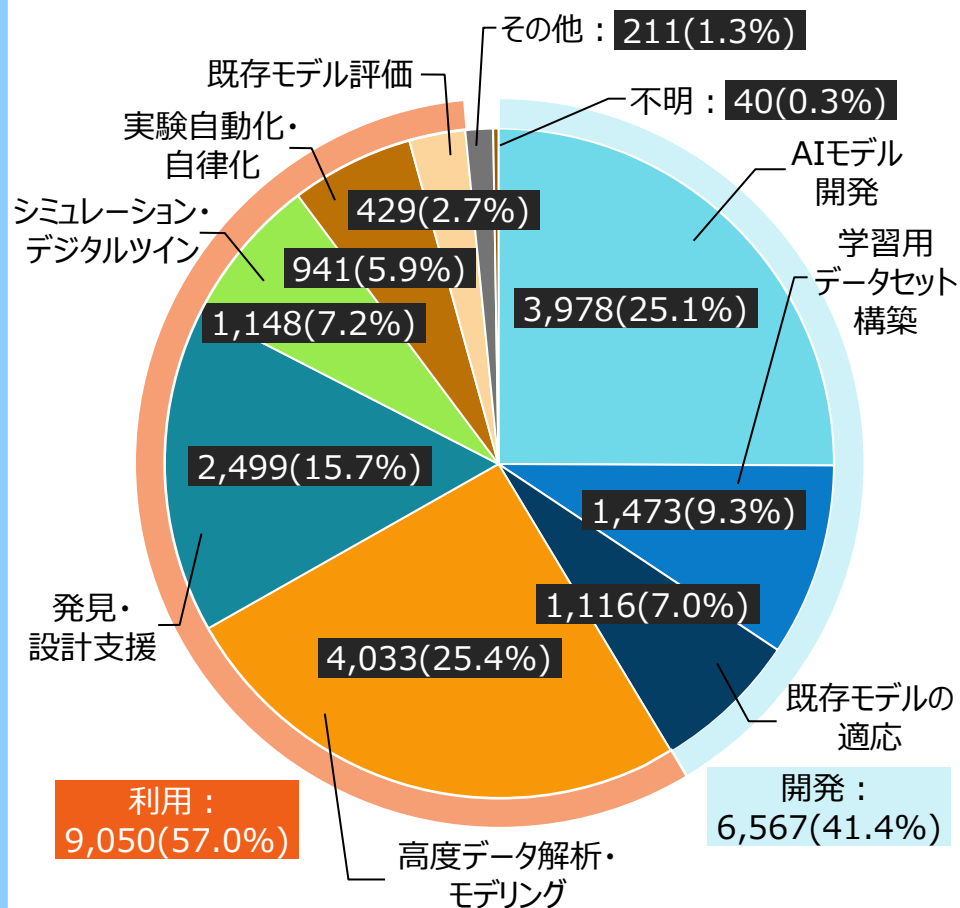


採択課題数：456件

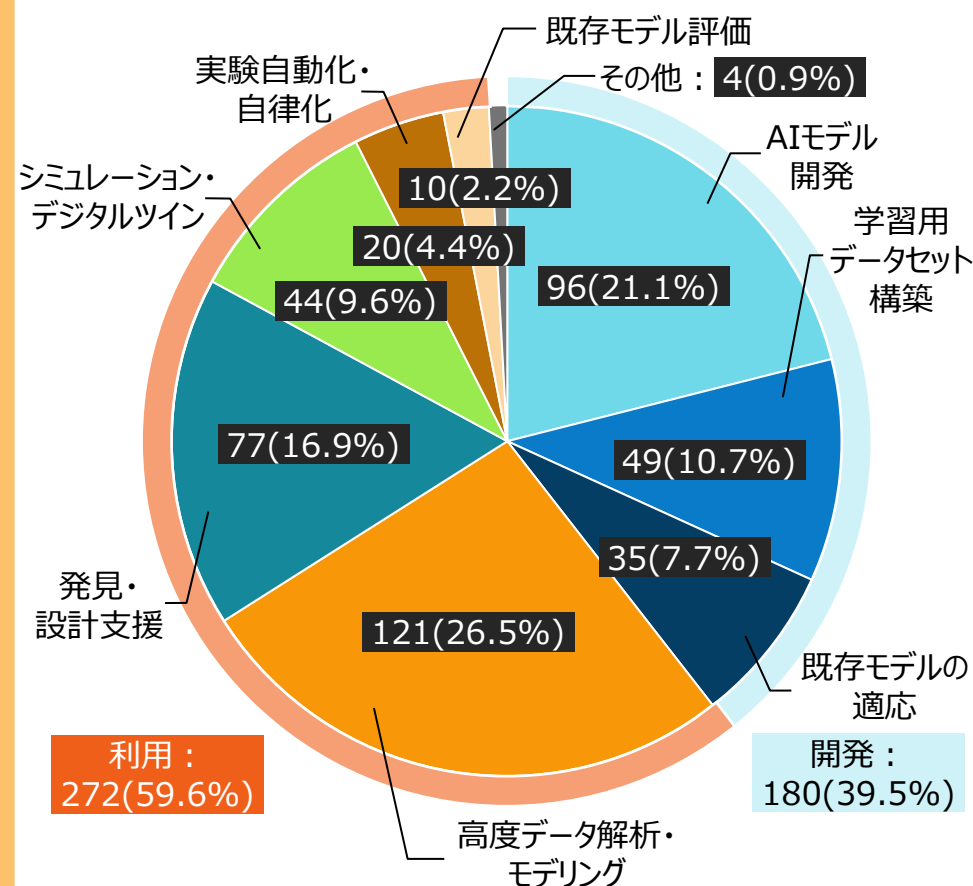


SPReAD 第1回公募 採択結果【ユースケース別】

応募課題数：15,868件



採択課題数：456件



SPReAD 第1回公募申請者の課題・悩み（AIインタビューより）

第1回公募において実施したAIインタビューの内容を元に、申請者（約1.5万人）のAI活用の悩み・課題を抽出。

※AIインタビューを実施した際に言及した人数が多い順に上から並べたもの。

1. **出力の信頼性・精度・ブラックボックス**
ー答えが正しいか確認できない・精度への不安、ハルシネーション・誤情報の頻発、なぜその結果になったかわからない（ブラックボックス）
2. **スキル・知識・学習不足**
ー使った経験が無く1人で進められるか不安、専門外で基礎から学ぶ負担が大きい、実装が自分でできない
3. **使い方・始め方・適用先が不明**
ーツール等をどう選べばよいかわからない、自分のデータにどう当てはめるかわからない、どこまでAIに任せてよいか・限界がわからない
4. **人材・連携・体制・仲間**
ー学生・チームへの指導・体制づくりが難しい、AI・情報系の専門家と連携・共同研究したい、組織内に詳しい人材がいない
5. **計算資源・ハードウェア**
ー機関内の機密情報ルールの制約から計算資源利用が難しい、GPUが足りない、計算環境が無くて始められない、スパコンへのアクセスが難しい
6. **セキュリティ・プライバシー・倫理・法**
ー研究データの漏洩リスク、研究倫理上どこまで使ってよいかわからない、個人情報外部AIに入力してよいか、著作権・知財の扱いが不明
7. **資金・コスト**
ーAPI・有料サービスの料金が安い、予算がなくてAI研究を始められない
8. **データの質・量・整備**
ーアノテーション・ラベル付け作業の負担が大きい、研究利用可能なオープンデータの探し方・活用方法が不明、新分野でデータセットが存在しない、学習データの収集・確保が困難
9. **進化が速くキャッチアップ困難**
ー研究・実装の方向性が陳腐化するリスク、勉強時間の確保が追い付かない、新ツール・新モデルの情報収集が追い付かない
10. **モデル・ツール選定の難しさ**
ーファインチューニング・カスタマイズ方法がわからない
11. **時間不足・処理速度**
ー多忙でAI活用に時間を割けない
12. **プロンプト・指示の出し方**
ー意図した出力をうまく引き出せない、聞き方で回答が大きくブレる、研究上の問いをAIへの指示に変換できない
13. **AI依存・人間の役割低下**
ーAIへの依存・丸投げへの懸念、創造性・オリジナリティの喪失、学生・次世代研究者への悪影響、思考力・問題解決力の低下への懸念

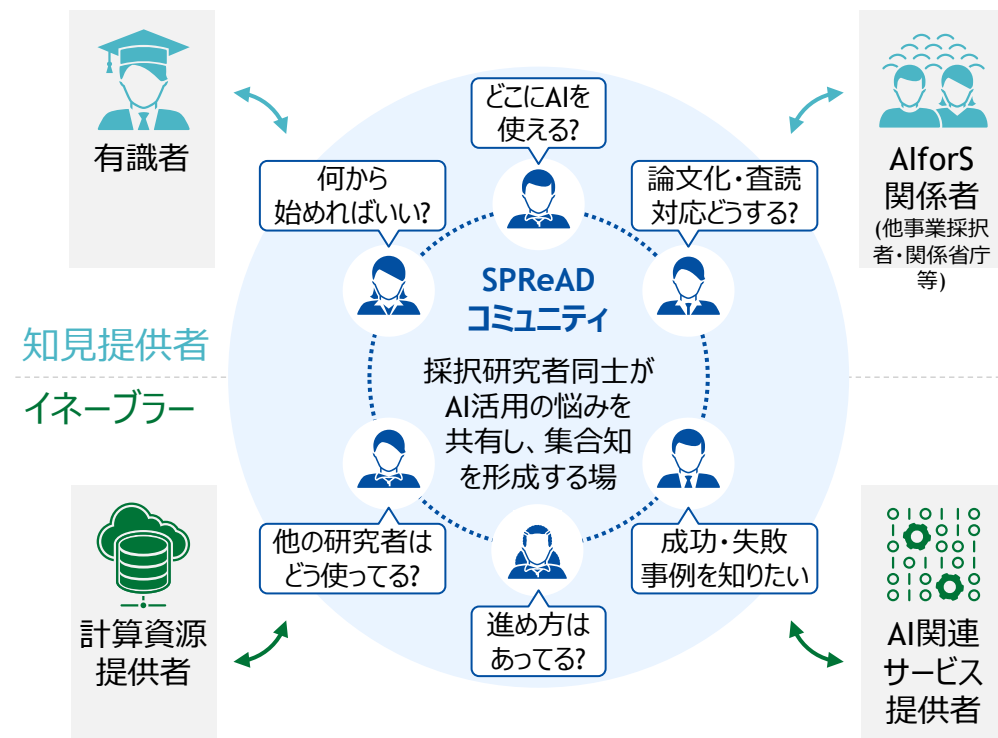
研究者主導であらゆる分野のAI for Scienceの視野を広げる研究コミュニティ

- 研究者同士がAI活用の課題及びその解消のためのコツを共有して集合知を形成する場
- 将来的には、コミュニティの拡大やナレッジ集積・自走化を目指す

当面の取り組み

研究者中心のコミュニティの基盤を形成

- ↔ 知見提供の繋がり (必要時)
- ↔ 支援リソースの繋がり (必要時)



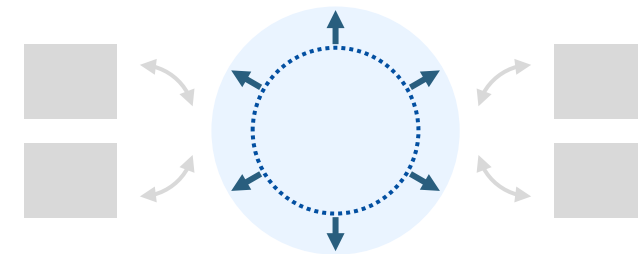
直近のスケジュール

- 7月下旬 : 第1回公募採択者向けのキックオフ
- 8月上旬 : AI活用学び合い会 (初心者相談会)
- 8月下旬 : 第2回公募採択者向けのキックオフ

今後の発展イメージ

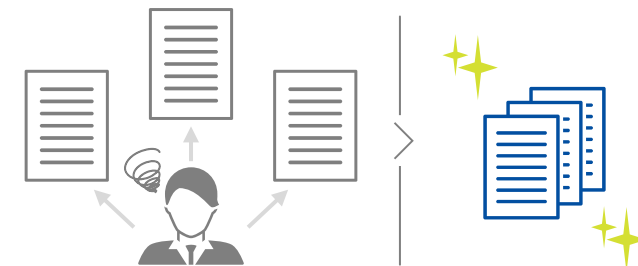
コミュニティの拡大

- 参加者拡大
- 研究活動の活性化
- 研究会・学会の設立



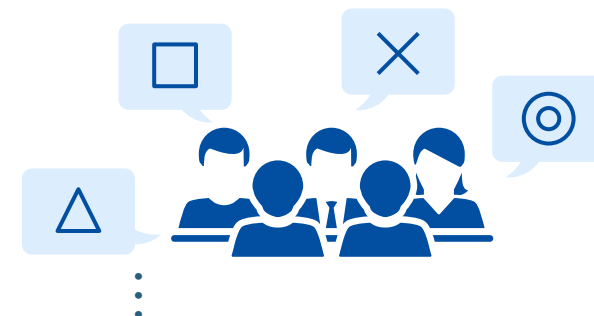
ナレッジの集積・可視化

- 事例・Tipsを整理・見つけやすく



研究者の声の反映

- 研究者によるAlforSに関する提言



SPReADの今後の課題と展望について

外部有識者やネット上から寄せられた主な声

全体として、制度趣旨への期待は高い一方で、審査・採択の納得感と運用面の課題が目立つ。

ポジティブな評価

-  新しい研究費モデルで挑戦を後押し
-  AI for Scienceの裾野拡大に期待
-  学生・若手にも門戸が開かれた
-  スピード感のある審査・採択
-  申請・審査負担の軽減に期待

懸念・違和感

-  採択率2.9%で狭き門
-  無作為抽出の納得感・透明性
-  学生の補助金執行管理が困難
-  事務方の申請手続・支援の負担
-  研究期間が短く成果創出ができない

今後の課題と展望

全国から15,000件を超える多数の応募を頂いたことは、研究開発現場におけるAI利活用への高い関心と意欲を示すものと受け止め。

一方で、本事業における試行的な制度設計を通じて、今後の改善論点も浮き彫りになっている。

① 審査・採択における透明性・信頼性の向上

- ✓ 無作為抽出や審査におけるAI活用の位置付けを分かりやすく示す。

② 採択規模の拡充

- ✓ 応募件数が採択件数を大幅に上回る結果となり、有望な提案であっても採択に至っていない可能性。

③ 継続的かつ切れ目のない段階的支援

- ✓ SPReADで生まれた研究の芽がその後革新的な研究成果に繋がるための支援が必要。

来たるAI時代において、SPReADを**研究者が挑戦しやすく、納得感があり、学際的知が循環する研究支援へと発展**させるため、今後実施を予定している**申請者や関係機関へのアンケート等**を通じて寄せられる意見も踏まえながら不断の見直しを行い、我が国におけるAI for Scienceの更なる波及・振興を図る。





文部科学省



SPReAD

AI for Science の推進に向けた基本的な戦略方針（政策概要）

今後5年間の集中改革期間（2026～2030年度）における国家戦略



なぜ今か（背景）

- ・ AIが研究プロセス全体を変革
- ・ 国際競争が急速に激化
- ・ 今後5年間の勝負期間



日本の強み

情報基盤

SINET、NII RDC、富岳NEXT、HPCI等

研究基盤

大型先端研究施設、高品質なデータ

社会基盤

製造・計測技術、暗黙知、等

日本の課題

- ✓ AI利活用の波及・浸透
- ✓ AI高度研究人材の増加
- ✓ 共用計算資源の増強
- ✓ データの効率的活用
- ✓ 信頼できるAIの追求
- ✓ スピード感



政策的な目的

- ① 研究の質・効率の飛躍的向上
- ② 世界を先導する科学的成果の継続的創出
- ③ 国際競争力の強化・新たな価値創造

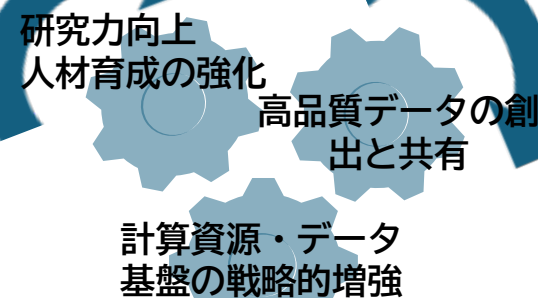
AI for Science による科学の再興

<目指す姿>

- AIが研究の自然な一部となる環境の実現
- 分野横断的人材が学術・産業双方で活躍
- 自律性と信頼性を備えた

AI for Science 先進国の地位を確立

戦略的な国際連携



新たなチャレンジと普及・振興

世界を先導する研究開発

重要技術領域の先端的成果創出および研究開発期間を1/10に

将来像と期待される成果

研究プロセスの自動化・自律化、探索範囲の拡大

複雑な現象の理解深化と新たな発見

社会課題解決と産業競争力への貢献

科学的発見の加速

新産業・ビジネスの創出

国民生活の質の向上

AI for Science の推進に向けた基本的な戦略方針（概要）

- 「第7期科学技術・イノベーション基本計画」や「人工知能基本計画」、AIを巡る国際動向等を踏まえ、具体的な取組方針を整理。
- 今後5年間で集中改革期間とし、具体的な20のアクションを設定して、大胆な投資によりスピード感を持って取組を加速。
- 日本の強みを生かして、①戦略的な国際連携による世界を先導する研究開発、②新たなチャレンジとAI for Scienceの波及・振興、③これを支える次世代研究基盤の構築、④AIを高度に利活用できる研究人材の育成等を、関係省庁等と連携して強力に推進。
- 研究環境と科学研究プロセスの革新により、自律性と信頼性を備えた研究国家としてAI for Science 先進国の地位確立を目指す。

日本の強み

- **情報基盤**：世界最高水準の情報流通基盤（SINET）・研究データ基盤（NII RDC）・計算基盤（富岳・富岳NEXT・HPCI等）
- **研究基盤**：世界トップレベルの基礎科学力と多様な研究者層、世界最先端の研究装置群と大型研究施設、信頼性の高い実験・観測データの蓄積
- **社会基盤**：世界有数の経済規模、精密な製造・計測技術・ロボティクス、すり合わせや暗黙知を含む現場知、AIに対する社会的・産業的な需要

目的 I. 科学研究の革新と科学的発見の加速・質の変革 II. 研究力の抜本的強化と科学の再興 III. 国際優位性・戦略的自律性の確保

中長期的な取組目標

科学基盤モデル/エージェントやAI駆動ラボの活用により重要技術領域の**先端的成果創出**及び**研究開発期間を1/10に**

今後5年間の目標

AI for Scienceの推進により、日本の科学研究における**国際優位性の確保**

（ターゲット例）



3年後までに、新素材開発速度10倍の潜在力を有するAI駆動ラボシステムを開発

将来は、AI駆動ラボシステムを用いて、我が国の企業が国際的サプライチェーン上不可欠なマテリアルを量産する。



3年後までに、大規模なデータ取得を通じて、高機能なバイオ製品の高効率設計を実現するバイオ生成基盤モデルを開発

将来は、仮想細胞・生体モデルや、植物、動物、ヒト臓器等の“デジタルツインモデル”を実現し、高精度かつ高効率なバイオ製品開発や創薬等に貢献する。



3年後までに、AIEージェント群による、最先端大型研究施設・研究装置からの大量・高品質データ創出や、仮説検証・実験の自動化・自律化を実現

新規性の高い研究を探索的に行うシステムの開発を通じて、科学研究の新しい方法論を示す。

戦略的な国際連携
（米国・英国など）

世界を先導する
科学研究成果の創出

AI for Science の波及・振興
による科学研究力の底上げ

AI for Science を支える
研究インフラの構築

（具体的な取組内容）

①**研究力・人材**
AI高度人材等の育成
×
AI利活用の促進

②**計算資源**
戦略的増強
×
利便性向上

③**研究データ**
高品質データの創出
×
データの一体的運用

- AI for Science のあらゆる分野での波及・振興と日本の強みを生かした重点領域の設定・投資を両輪で推進、世界トップ層との戦略的国際共同研究を推進
- AIの基礎研究含むAIそのものの研究の強化（リスク対応含む）
- 国際連携・産学連携を通じ、AI・計算資源・データに精通した人材の参画・育成、技術専門職の育成・確保、評価や処遇の見直し
- 世界最高水準の次世代AI・HPC融合プラットフォーム「富岳NEXT」の開発
- AI共用計算資源の戦略的な増強と利便性（機動性、アクセス性、相互運用性）の向上
- 産業界との連携及び国際連携を通じた計算資源の有効活用
- 戦略的価値の高いデータセットの特定・構築
- 自動化・自律化した研究設備等の整備と研究データ創出プロセスの標準化
- AI時代に即した次世代情報基盤の構築・活用、データの一体的運用

※「AI for Scienceの推進におけるAI利活用に係る研究データの取扱いに関する考え方」についても整理。



本事業の3つの柱

01



01

迅速な支援

02



02

AI導入に必要な伴走支援

03



03

独創的研究の芽出し支援

01

迅速な支援



01



02



03



AI 分野は技術革新の速度が極めて速く、研究に必要な技術、ツール、計算資源等が短期間で大きく変化します
このため、従来型の支援スキームでは、研究の着想から実装までの間に技術的優位性を失うおそれがあります

本事業では、このようなAI分野の特性を踏まえ、**機動的かつ挑戦的な審査・採択を実現**することにより、研究に必要な計算資源、データ整備、ソフトウェア利用環境その他の研究基盤を確保するための資金を、迅速かつ適切に支援します



あらゆる分野の1,000件程度の
研究課題を審査・採択

02

AI導入に必要な 伴走支援



01



02



03



AIを科学研究に導入するに当たっては、研究分野ごとに、様々な課題が生じます

また、研究者等の間には、AIに関する知識や経験、活用ノウハウに相当の差が存在しており、これがAI導入の障壁となる場合があります

本事業では、研究者等がAI導入に必要な知見を適時適切に得ながら研究を推進できるよう、伴走支援体制を構築・提供いたします

- 研究者コミュニティの形成および、当該コミュニティに関連するイベントの企画・運営 等
- 研究実施に際して生じる課題に関する問い合わせ窓口の設置・案内



研究の高度化の促進、分野横断的な連携や
実践知の蓄積・共有

03

独創的研究の 芽出し支援



01



02



03



AI for Scienceの発展においては、
既存の延長線上にある研究のみならず、
現時点では小規模であっても、
独創的かつ挑戦的な研究の試行の中から、
将来的に大きな波及効果を有する新たな手法や
研究領域が生まれる可能性があります

本事業では、研究者等による挑戦的かつ独創的な
研究アイデアの創出と実証を積極的に支援し、
萌芽的・探索的な研究が育つ環境を醸成することで、
我が国におけるAI for Scienceの持続的な発展を支える
豊かな基盤の形成を目指します



PoC等を通じたAI活用の検証、ノウハウ抽出・
共有、成果の波及可能性を重視

(参考) 第7期科学技術・イノベーション基本計画

(4)研究評価の見直し、研究資金制度の継続的改善等

国際的な研究評価改革の動向等も踏まえつつ、政策、施策及び研究開発プログラムの評価の在り方についても検討した上で、「国の研究開発評価に関する大綱的指針」（平成28年12月21日内閣総理大臣決定）について2026年度内を目途に見直す。その際、科学技術・イノベーションにより社会課題を解決していくという観点から、経済・社会への影響を評価するとともに、定量的評価に過度に偏重しないようにすることも考慮する。

競争的研究費に関し、特に継続的に公募を行うものについて、新たな資金配分の方策を探り、都度ピアレビューを経るのではなくそれ以前の成果・実績等に連動して配分する仕組みや、申請書作成や審査の負担を軽減しつつ不確実性への投資が可能となる仕組みを検討し、スモールスタートでその効果の検証も踏まえながら展開を図る。また、研究力を先端的な手法を取り入れつつ多様な視点で分析、評価する手法を検討する。

各競争的研究費において、その使い勝手の改善を図る。同時に、研究時間確保に向けて、申請書・報告書等の刷新を始め、資金配分機関の連携を含めた申請手続等の簡素化・効率化を進める。

また、アカデミアにおける、学協会の活動・運営負担の在り方やヒエラルキー構造、それに伴う論文のオーサーシップの在り方といった慣習の見直しについても後押しする。

(参考) 日本学術会議提言「研究の活性化へ向けた研究評価の具体的な改善方策」

提言 6 評価制度改革に向けた実験的導入と検証を支援する制度を創設する

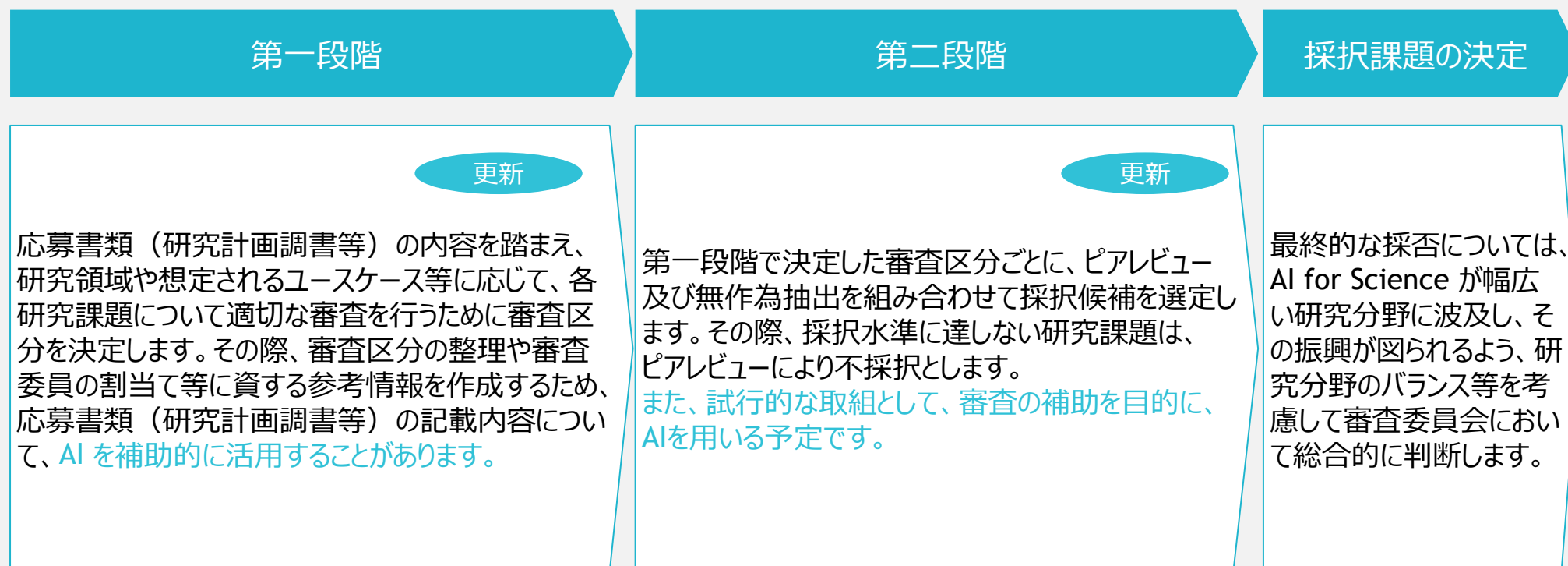
資金配分機関は、国内外の先行事例を参考に、準ランダム配分（ロタリー・ファンディング）や AI による審査支援など、新規性の高い手法を実験的に導入し、その効果や影響を検証すべきである。ただし、本質的な解決は研究費総額の拡充と評価体制の強化であり、準ランダム配分や AI 審査支援はその代替とまでなるものではなく、適切な設計の下で課題の一部を緩和し得る補完的な方策にとどまる。

実験的導入では、その効果を確認した上で修正していくことを前提に、柔軟な制度設計と検証サイクルを伴うことが重要であり、このような取組を継続することを通じて、持続可能で公平かつ革新的な研究評価システムへの移行を加速させることができる。また、このような実験的導入を進めるには、評価制度の設計や評価者育成、データ基盤整備などを通じて、関係者の能力を高めることが必要である。

第2回公募時

審査の全体像

公募の審査は、以下の通り二段階により実施し、全体を通じて非公開で行います。



第2回公募時

第一段階

第二段階

採択

ピアレビューは各研究課題について複数（原則として2～3名）の審査委員が行う審査、無作為抽出は乱数に基づく機械的選定により採択候補を決定する方法

ピアレビューおよび無作為抽出の方法

ピアレビュー



研究領域及び AI 領域の専門家その他の外部有識者により構成される審査委員会の下で、各研究課題について複数（原則として 2～3 名）の審査委員が行う審査を指します
ピアレビューでは、主に以下の観点に基づき評価を行います

- AI 利活用の妥当性・実現可能性
- 研究実績
- 実施計画・資金活用の妥当性
- 研究課題の優位性・新規性
- AI 利活用のノウハウ抽出や共有の実現性
- 成果の波及可能性

試行的な取組として、審査の補助を目的に、AIを用いて、研究計画調書の記載内容について、審査上確認を要する事項を抽出・整理し、審査委員が重点的に確認すべき論点を参考情報として提供する予定です。なお、AI による出力結果のみをもって採否を決定することはありません。

更新

無作為抽出



対象となる研究課題について、機械的な方法により乱数を生成又は付番し、その値の昇順に従って、あらかじめ定めた件数に達するまで採択候補を選定する方法により行います。

第2回公募時

第一段階

第二段階

採択

分野バランス等を踏まえて総合的に採否・配分額を判断。個別の審査内容等は開示できないことを、あらかじめご了承ください

採択可否・配分額の判断と審査結果の通知に係る留意事項

採択可否や配分額の判断

最終的な採否については、AI for Science が幅広い研究分野に波及し、その振興が図られるよう、**研究分野のバランス等を考慮して審査委員会において総合的に判断**します。

なお、採択候補となった研究計画については、必要に応じて、研究計画の実施に要する経費の内訳及びその妥当性について確認を行う場合があります。

また、本事業では限られた予算の範囲内で、あらゆる分野におけるAI for Science の波及・振興を図る観点から、できる限り多くの研究計画を支援できるよう、**採択率を重視して配分を行う予定**です。

このため、採択された研究計画については、申請額を下回る額で配分額を決定することがあります。

審査結果の通知

審査結果に基づく採択、不採択については、e-Radにより研究代表者及び機関等に通知します。

本事業においては、AI 分野の技術的潮流の変化が速いことを踏まえ、**機動的な支援を実現する観点から、審査・採択に当たっては迅速性と適切性の両立を図ることを重視**しております。

このため、審査委員に対して、審査に係る個別の所見、コメント等を求めないこととしており、審査結果に係る所見、**コメントその他個別の審査内容等は開示できないことを、あらかじめご了承ください。**

採択された研究課題については、その概要を文部科学省HP等に公開します。

(参考)基礎研究振興部会における議論

※令和 8 年 3 月 4 日 第21回基礎研究振興部会
【資料 1】「基礎研究の振興について～評価の視点から～部会における主な意見の整理について」より

評価疲れ・審査コストの増大

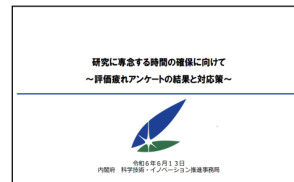
- 令和 6 年に内閣府にて行われてた「評価疲れ申請疲れに関するアンケート」では、申請書・報告書の作成負担についての意見が多くみられた
- 令和5年の日本学術会議若手アカデミーによる提言では、審査コストに関する問題意識が挙げられている

評価疲れアンケートの回答結果（一部抜粋）

○申請書・報告書の執筆が負担である

主な意見

- 現行制度では申請書の作成と審査にかかる負担が大きすぎ、他国の研究者と競争する前に自国の研究者で同士討ちをするために多大な労力を割いているように思える。
 - 最近は少額の制度にまで大量の申請書と面接審査が求められるようになってきており、研究者全体の大きな負担になっている。
 - 申請や報告の書類を執筆する時間が研究時間を圧迫しており、本末転倒である
- ※なお、科研費については改善されているという声が大きかった



日本学術会議若手アカデミー提言（一部抜粋） (2) 研究環境改善のために今から取り組むべき課題

- 科学技術政策が軸足を基盤経費から競争的資金へと移す流れの中で、提案者も審査員も提案と審査に多大なエフォートを割き、これが双方に“評価疲れ”とも呼べる過大なコストを強いている。
- 過剰な審査コストの軽減策の 1 つとして、ピアレビューによって明らかに不適当な課題（および明らかに卓越した課題）をスクリーニングした上で残った提案からランダムに採択課題を選択する“スクリーニング＆ランダム”方式などを導入することも提案できる。



研究評価改革の議論を受けた新たな評価手法： 実験的ファンディングとは

【英国 Research on Research Instituteによる定義】

研究申請のレビュープロセスに新規の手法で介入し、効果を検証することでファンディングシステムの効率化や効果の最大化を狙う取り組み



研究課題事前評価プロセスで一般的に指摘される課題

- 科学の仕組みを用いたシステムの効率化
科学研究で用いられる実験的手法を科学システムに応用し、効率やファンディング結果の向上へつなげる
- 採否のボーダーラインにある申請書の評価が困難
研究者が労力をかける研究申請書のほとんどは採用されない。
採否のための事前評価にも労力がかかるため、より効率の良い資金配分方法を模索
- ファンディングに関する労力の軽減と質の高い申請採択との両立
研究者が労力をかける研究申請書のほとんどは採用されない。
採否のための事前評価にも労力がかかるため、より効率の良い資金配分方法を模索
- ピアレビューシステムの限界
ピアレビューの品質やレビュアーの確保の解決案を模索
- バイアス軽減
性別、研究キャリア、所属機関といったバイアスの低減
- 多様な研究者からの研究申請促進

Bendiscioli, Sandra; Firpo, Teo; Bravo-Blosca, Albert; Czibor, Eszter; Garfinkel, Michele; Stafford, Tom; et al. (2022). The experimental research funder's handbook (2nd edition, ISBN

研究課題の事前評価に関する実験的ファンディング手法例



手法	概要	期待されるメリット	想定されるデメリット	導入例
AIによるレビュアー割り当て支援	申請書へ割り当てるレビュアー候補リスト作成にAIを用いる。	・ファンディング機関の負担軽減 ・申請者とレビュアーとの専門性合致	導入例が極めて少ないが、特にデメリットは報告されていない。	スイス国立科学財団、オーストラリア研究会議など
くじ引きファンディング	採否のボーダーラインにある申請をランダムに採択。	・評価者、ファンディング機関の負担軽減 ・無意識のバイアス低減	被評価者の評価に対する信頼を損なう恐れがある。	British Academy, Healthcare NZ, スイス国立科学財団など
マネーの虎形式	審査員へのプレゼンテーションのみでの採択決定	・革新的なアイデアの採択	プレゼンテーション能力が高い母語話者に採択が偏る可能性がある。	UKRI-EPSRCなど
申請者の匿名化	レビュアー、審査委員会へ申請者を匿名化した上で評価を実施。	・バイアスの低減 ・革新的なアイデアの採択	申請者の研究実施能力の評価が制限される	NIH、UKRI-EPSRC、オーストラリア科学基金など
分散型ピアレビュー	申請者が他の申請者のレビューを担う。	・レビュアーの確保 ・レビュアー一人当たりの負担軽減	悪意のある申請者による他の申請への低評価	フォルクスワーゲン財団など

➡ くじ引きファンディング、分散型ピアレビューでは近年効果検証が進む

Rushforth, et al. 2025. Transforming Assessment: The 2025 Global Research Council Survey of Funder Approaches to Responsible Research Assessment. May 2025. <https://doi.org/10.6084/m9.figshare.28856480>. 42/75CRDS作成



（出典）基礎研究振興部会第20回（令和7年11月10日） 各国の研究課題評価の状況と研究評価改革の動向（CRDS 菊地フエロ・説明資料）